大日塚をめぐる一考察

――千葉県旭市旧干潟町溝原周辺の事例から――

松田睦彦

はじめに

千葉県旭市の旧干潟町は旭市の最北部に位置し、江戸時代初期に干拓の行なわれた南部の平地と、北部の台地から形成されている。溝原は旧干潟町の北東部に位置し、同じ干潟町の中でも、寛文期（一六六一―一六七三）に新田開発とともに成立した万歳や関戸といった地域に比べて古い歴史をもつ地域のひとつである。この辺りに古くから人が住んでいたことは、溝原周辺で旧石器時代の遺構や平安時代の集落跡が発掘されていることによって知ることができる。文献史料には、元亨二年（一三二二）二月二十九日の「東盛義代官盛信知行配分注進状案」に溝原寺という記述が見られる。溝原寺とは現在の東栄寺のことである。

さて、東栄寺の南東へ直線距離にして約三〇〇メートルの位置に諏訪山（すわやま）がある。諏訪山とは言っても孤立した山の形を成しているわけではなく、下総台地の連なる丘陵の一角が諏訪山と呼ばれる土地である。右記の「東盛義代官盛信知行配分注進状案」[1]には「諏方大名神」という記述が見られることから、古くはこの地に諏訪神社が祀られていたことが分かる。『東庄町史』でも「諏方大明神」の項で、ここが「諏訪大神の跡地で、同大神は明治初年に熊野神社に合祀された」という話を紹介している[2]。現在この地は溝原の共同墓地となっており、大日塚はこの墓地の中にある。塚の上には銘文のまったく刻まれていない胎蔵界大日如来座像と、天和二年（一六八二）の年号が刻まれた地蔵菩薩像が安置されており、その横に大正七年（一九一八）と刻まれた墓地整理事業を記念する小さな石板が転がっている。

溝原周辺の共同墓地には、同様の大日塚を見ることができる。この地域の大日塚とは、幅一一～一四メートル、高さ二～三メートルほどの盛り土の上に大日如来の石像を安置したものである[3]（写真1・2）。梵字や漢字のみが刻まれた文字塔は、溝原周辺の大日塚では確認することができなかった[4]。小稿では、このような塚とその頂上に安置された大日如来像をひと括りとして大日塚と呼びたい。塚をともなわない大日如来像については、大日塚とは別けて考える。ただし、過去に塚の上にあったという伝承を持つ大日如来像については、大日塚と同様に扱うこととする。

筆者は、右で規定した大日塚と、かつては塚の上に安置されていたという伝承をともなう大日如来像を、溝原とその周辺地域、すなわち、干潟町清和甲・桜井・長部・南堀之内および東庄町東和田・舟戸・

写真１：清和甲の大日塚。塚の頂上に大日如来像が安置され、手前にはロクドウが見える。

写真２：清和甲の大日如来像。花が供えられている。

神田（以下「溝原周辺地域」とはこれらの地域を指すこととする）で八ヶ所確認することができた。また、その他の地域では山田町古内・府馬・田部沖の三ヶ所で確認することができた。

小稿の目的は、大日塚がどのようにして溝原周辺の地域にもたらされ、また、その信仰内容がどのようなものであったのかを、現在でも行なわれている慣行や像の銘文、当時の宗教者の活動などをとおして明らかにすることにある。

一　大日塚研究史

柳田國男は塚について、「総て人を葬つた場所である様に見做」す一般的な見方に対して、「塚の中には、太古から明かに二通りの区分があつて、人間の葬所でなかつた塚が其数が甚だ多い」とし、そういった「人間の埋葬の為に築いた以外の塚」を「一種の祭場」であると述べている。さらに大日塚については「大日の石造又は石碑を塚の上に安置し、或は其種字を書いた石片とか鏡などを塚に築くこともいくらも例がある」とし、また、「富士塚、浅間塚、庚申塚の類」を築いた「先達」が「一種仏教と神徒との中間に位する、今日で言へば山伏といふ様なものであつたらうと思ふのは山伏塚、行人塚、聖人塚、比丘尼塚などいふ塚も多いので、之を想像せしむる」と、塚と修験者との関係についても言及している。(5)

今井善一郎は「一面は修験、山伏と同様な性質の人達であると共に、他面時宗系の鉦打にも類似した処のある念仏の道者」でもあった行人の築いた塚を行人塚と呼び、柳田の区分にしたがってこの行人塚の成因を「その塚に行人が埋けられてゐるか否か」で二つに大別した上で、それぞれをさらに二つに分けて整理している。すなわち、前者の場合には行人塚は行人の墓地あるいは土中入定の場とするものであり、後者の場合には儀式に使用した供養塚あるいは行場の跡とするものである。

その上で今井は、供養塚としての行人塚が千葉県各地に存在し、そのような地域では、男性は一生に

一度は出羽三山に登拝するものとされ、羽黒山から持ち帰った梵天と呼ばれるお札がたまると、行人塚に埋めるという風習が存在することを報告している。この塚は「八九尺の小から十間二十間に亙る大きなものまであつて、形は正方形三段」であり、この形状を「ある時代真言宗の儀軌による壇法に従つたもの」としている。さらに梵天を載せる「神輿の如きもの」を「大日様」と呼ぶ市原郡市原村の事例や、行人塚の上に「大日如来の碑」を載せる群馬県利根郡新治村と富野郡高田村の事例を紹介し、「行人塚上の大日碑は当然行人達の信仰対象の表示」との解釈を示している。また、山岳信仰における「塚によつて山霊を招き祭る」類例は富士塚など他にも存在することが指摘されている。(6)

一方、松崎憲三は今井以来の行人塚研究を整理し、その築造目的を

（イ）行人塚は、行人の祭祀乃至は修行の施設として築かれた。

（ロ）また、行人の中には古墳や既存の塚をそうした施設として利用するケースもあった。

（ハ）そうした塚が、入定塚（入定窟）となったり、あるいは行人の埋葬地となる場合もあった。

（ニ）中には当初から入定塚・埋葬地として築かれたものもありうる。

の四つに分類した上で、千葉県安房地方の入定の伝承または埋葬をともなう行人塚について、考古学の成果を活用しながら、「自然の岩窟の中で木食行に入り、入滅後そこに設けられた入定墓に埋葬されるケー

表：旧干潟町周辺の大日塚および大日如来像

	町	字	所在地	塚寸法 （幅×奥行×高）単位㎝	石像寸法 （幅×奥行×高）単位㎝	和暦	西暦	月日	大日の種別	形態	銘文
1	干潟町	溝原	共同墓地 （諏訪山墓地）	14×13×2,3	47×35×105				胎蔵界	舟形・座像	
2	干潟町	桜井	共同墓地 （大塚山墓地）	11,6×11,5×2,5	54×42×103	元禄15	1702	11月1日		石祠	（正面上部）□殿山 （正面右）奉建立大日如来尊像一躰成就修□ （正面左）我願既満衆望亦足 生□ 隠居無量院 □誉西光寺 （左側面）—□元禄十五壬午十一月朔日 上代桜井村
3	干潟町	清和甲	共同墓地 （境之台墓地：旧男墓）	13×12,3×2,8	40×27×84	天和2	1682	11月8日	胎蔵界	舟形・座像	（右）天和二壬戌年 （左）霜月八日
4	干潟町	長部	共同墓地 （旧男墓）	3,6×5,1×2,1	43×25×92	元禄2	1689	2月吉日	胎蔵界	舟形・座像	（右）奉修造大日如来一躰所本願俊良 （左）為本願結衆十三人郷中二世安楽
5	干潟町	南堀之内	共同墓地	台座	59×25×91	貞享1	1684	11月15日	胎蔵界	舟形・座像	（右）奉造立湯殿山參詣成就 （左）貞享元子十一月十五日願主法海
6	東町	神田	共同墓地 （臼毛墓地）	台座	44×25×117	延享2	1745	11月吉日	胎蔵界	舟形・座像	（左）延享二乙丑十一月吉日
7	東町	東和田	共同墓地 （旧男墓）	台座	46×30×103	寛文9	1669		胎蔵界	舟形・座像	（右）奉待二十夜二世楽所女姑衆 □時寛文九之天 （左）奉建立湯殿念仏供養大日壹□所 本願阿闍梨什□ 惣檀
8	東町	舟戸	共同墓地	12,3×13,9×3,1	34×25×75	延宝2	1674	10月7日	胎蔵界	舟形・立像	（右）延宝二甲寅年十月七日 （左）下総香取郡東之庄上代村長□

ス、あるいは小丘や丘陵の頂に人定墓を設けて埋葬されるケースが目立つ」との指摘をしている。また、「一般に行人塚が信仰対象、祭祀対象となりやすいのは自埋型のもので、行人が死に際して衆生救済を意味する遺言を残したケースが多い」ともも指摘している[7]。

大日如来像や大日塚の多く分布する茨城県では、『茨城の民俗』誌上でおよそ三〇年前から活発な議論が行なわれてきた。その議論の内容は多岐に渡っており、複雑である。『茨城の民俗』では、中世から現代まで、かなりの時代幅をもった大日如来像が取り上げられているが、そこでは、時代ごとの信仰内容が細かく分析されることは少なく、多くの論者が時代を貫いた信仰を想定しているようである。その信仰とは、大日如来信仰が祖霊信仰に基づくとする説と、大日如来を太陽神とみなし、五穀豊穣を願

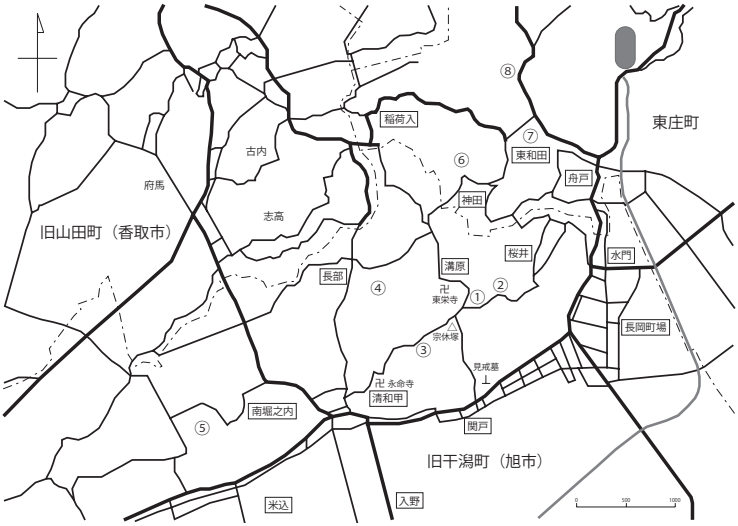

図１：大日塚の位置　図内の数字は表と対応する

うものとする説とに大別される。[8] しかし、ひとつの説に基づいて原初形態を探ろうとする方法には限界があるであろう。寛永期の大日塚の造立および信仰がどのような人びとによって指導せられたかについては、湯殿山系の修験者であるとする論者が多いようであるが、羽黒山系の修験者とする論者もいるようである。時代や地域による違いを想定すべきであろう。

『千葉県の歴史』では、出羽三山信仰が「下総・上総・安房にほぼ万遍なく分布しているが、とくに市原郡域など上総西部地方に濃密である」一方で、逆に日蓮宗が分布する「九十九里浜平野中南部一帯」は「空白地帯」であるとしている。ここでは「房総における出羽三山講の分布」と題された地図が掲載されているが、この地図からは旧干潟町や東庄町における講の存在は確認することが

できない。[9] 千葉県における出羽三山信仰の存在を示す最古の石造物は市原市に現存する寛永七年（一六三〇）の出羽三山塔であるというが、出羽三山への民衆の登拝は、一般的には延宝年間（一六七三―一六八一）に一部の村で始まり、多くの村では元禄～享保年間（一六八八―一七三六）前後に開始されたという。[10]

以上のような研究史をふまえると、実際の埋葬をともなう行人塚もあるものの、大日塚の多くは出羽三山系の修験者または出羽三山に登拝した在家の行人によって宗教的儀式のために造立された宗教施設であり、[11] 茨城県や千葉県では寛永期に普及したものと考えてよさそうである。しかし、それが具体的にはどのような人びとによって、あるいはどのような契機で造立されることとなったのかは、それぞれの地域の個別的な事例から検証されなければならない。また、それぞれの地域では、現在、大日塚に関わるどのような信仰が持たれているのであろうか。現在でも生きた宗教施設として存在する大日塚に対する信仰についても明らかにされなければならない。

二　干潟町周辺の大日塚

（1）大日塚の概要

右で述べたように、筆者の調査では溝原周辺地域の八地区において大日塚が確認された。以下、表お

よび図1を参照しながら、溝原周辺地域の大日塚の概要についてまとめておきたい。

まず、大日塚が築かれている場所は、すべて共同墓地である。また、男女の墓地が別けられている、あるいは過去に別けられていた墓地（清和甲・長部）では、大日塚は必ず男性の墓地の方にある。

次に、塚の大きさは幅・奥行ともにおよそ一一～一四メートル、高さはおよそ二～三メートルとなっている。長部の塚のみは他と比較して小型となっているが、高さは他の塚と大きく変わらないことから、築造時よりも小さくなっていることが推測される。[12] 塚の形は茨木民俗学会での議論[13]や『千葉県の歴史』でも報告されているのと同様に、変化の大きい長部を除けば、塚の残る溝原・桜井・清和甲・舟戸のすべてで方形と認めることができた。ただ、『千葉県の歴史』においては「三段につくられている事例が多い」[14]とされているが、溝原周辺地域の大日塚では、段は確認されなかった。

大日如来の種類に関しては、溝原周辺の地域ではすべてが胎蔵界大日如来である。また、形態は舟戸のものが立像である以外はすべて座像である。桜井は石祠であり、中の像が大きく破損しているため、種類は不明である。像形は桜井を除いてすべて舟型であり、材質は安山岩と認めることができる。

次に、溝原周辺の大日塚の大日如来像に刻まれた年代を見てみよう。無銘の溝原を除くと、最も古いものが東和田の寛文九年（一六六九）で、最も新しいものが神田の延享二年（一七四五）である。これだけでも七六年の間におさまるが、二番目に新しいものは桜井の元禄一五年（一七〇二）であり、もっとも新しい神田との間には四三年の開きがある。したがって、この神田の大日如来像を例外と考えると、

寛文九年から元禄一五年のわずか三三年の間に、残りの六つの大日塚が造立されたことになる。

その他の地域における大日塚造立の年代についても、山田町古内の延宝六年（一六七八）から同じく山田町府馬の元禄七年（一六九四）というように、溝原周辺の大日塚の造立年代と重なる。ただし、山田町田部沖の大日塚に関しては、後述するとおり造立の指導者と造立契機がはっきりとしているため、例外として扱いたい。

このように大日塚の造立時期を概観してみると、神田を除けば一六〇〇年代中期から一七〇〇年代初頭にかけて大日塚の造立が一時的に流行したということがわかる。

次に、大日如来像に刻まれた銘文から、大日塚の造立契機を考えてみたい。

まず、溝原周辺地域の大日塚のうち造立契機の書かれていない溝原と神田と舟戸、そして清和甲を除いた四ヶ所の事例を見てみたい。

東和田では女性たちによって、「二世楽所」を願った月待が二十日の夜に行なわれていた。さらに男性は湯殿山信仰に基づいた念仏を行なっていた。また、南堀之内では「湯殿山参詣成就」を記念している。長部では「郷中」の「十三人」によって「二世安楽」が願われている。桜井の石祠には「我願既満衆望亦足」と造立契機が記されている。

これらの記述からは「二世安楽」や「月待」、「念仏」、「湯殿山参詣成就」、「満願成就」といったそれぞれの地域における造立契機しか抽出することができない。そこで、さらに範囲を広げ、他の地域にお

ける大日塚の造立契機を見てみたい。

山田町府馬の路傍にある大日塚には胎蔵界大日如来の座像と金剛界大日如来の座像が安置されているが、まず、胎蔵界大日如来像からは「二世安楽」を願った「十九夜待」が行なわれていたことが分かる。また、金剛界大日如来像では大日如来縁日の「念仏成就」が記念されている。さらに、女性の間では「二十一夜待」が行なわれていた。同じ山田町田部沖では毎月「百万遍念仏」が行なわれていた。ただし、この大日塚の造立契機ははっきりとしている。同所出身の天台宗の僧円海が帰郷し、信仰を広めたものだという。[15] 以上の記述からもやはり「二世安楽」や「月待」、「念仏」といった造立契機を見ることができる。さらに「二世安楽」という造立契機の三ヶ所のうち二ヶ所は「月待」と同時に書かれている。つまり、大日塚にともなう信仰内容は、その多くが塚の造立当時にあっては「二世安楽」を願った「月待」を行ない、「念仏」を唱えることや、湯殿山参詣を記念することにあったと推測される。

（2）大日塚をめぐる民俗

それでは、このような特徴を持つ大日塚は、現在どのような存在として認識、あるいは信仰されているのであろうか。聞き取り調査の及ぶ範囲内で簡単に触れておきたい。

溝原の大日塚は諏訪台の共同墓地にある。塚の周りには無縁となった墓石が集められており、最も古いものは延宝七年（一六七九）まで遡る。溝原の人びとは自分の先祖の墓に参るときには必ず先に、大

日塚に手を合わせているという。

また、この墓地に死者を埋葬するときには、葬列がまずこの大日塚の前にあるロクドウ[16]に来て、遺体あるいは遺骨をその上に安置し、僧が読経する間に身内の者が左回りに六回ロクドウの周囲を回る。さらに溝原では、お産を自宅で行なっていた時代には後産をこの塚の後ろに埋めていたという。したがって、イナヅカ（胞衣塚）という名前も残っている。

現在、塚の整備は老人クラブが受持っており、春と秋の年に二回、三角芝や宗休塚[17]と一緒に草刈りが行なわれている。

溝原の南西に隣りあう清和甲の境之台墓地にある大日塚は、古くは男性の墓地であったという。それが三〇年ほど前に整備事業が行なわれ、現在のような男女に関係ない共同墓地となった。女性の墓は清和甲の永命寺の近くに現在でも残っているが、ここには大日塚も大日如来像も見当たらない[18]。

葬式の際には溝原と同じようにロクドウ回りが行なわれるが、ここでもロクドウは墓地の昔の入口から見て正面、大日塚の前にある。さらに、お産が自宅で行なわれていた時代には、後産や流産した子供の遺体を大日塚の脇に埋めたという。これは年寄りの役目であった。また、疫病で亡くなった人の遺体は大日塚の後ろで火葬された。なお、清和甲の氏神である脇鷹神社の高さとこの大日塚の高さは、同じだと言い伝えられている。

現在、大日塚にともなう特別な行事は行なわれていないが、盆や彼岸に墓参りをするときには、同時

に大日塚に対しても手を合わせ、供え物をするという。

大日塚の整備は境之台墓地を管理する役員の仕事である。この墓地に墓のない人でも、役員になると大日塚に気を遣わなければならない。盆の供養の前には草刈りが行なわれる。

最後に舟戸の大日塚の事例を見ておこう。舟戸では春秋の彼岸と盆の墓参りの際に、地蔵と大日塚には必ずお参りをするという。大日塚の下で線香を焚き、手を合わせる。大日塚は「大日さま」と呼ばれている。

以上のような大日塚にまつわる現在の慣行を整理すると、次の四点の特徴を抽出することができる。①墓参りの際に最初に大日塚に対して手を合わせる、②大日塚の前にロクドウが設置されている、③大日塚の後ろで後産や異常死者を処理する、④定期的に草刈などの整備が行なわれている。

まず①についてであるが、この慣習はかなり一般的なものといえる。前出の溝原や清和甲だけでなく、東和田においても自分の家の墓に参る際には、先に大日塚に線香を供えるという。しかし、このような慣習は大日塚に対してだけ行なわれる特別なことではない。一般的に六地蔵が入口や敷地の重要な位置を占める共同墓地は多く、墓参に訪れる人がまず最初に六地蔵に参るという例はよく聞かれる。つまり、大日塚と他の地域で見られる六地蔵等とは、同じような役割を果たしていることが推測されるのである。この問題に関しては②の問題と共に後述したい。

次に③の大日塚の後ろに後産を埋めるという慣習に関しては、溝原と清和甲以外では聞くことができ

なかった。他の地域で後産の処理の仕方を聞くと、自分の家の墓に埋めるという例（東和田）が聞かれる。後産を墓地に埋めるという例からは、後産の生児への影響力に配慮する心意が感じられるが、大日塚の後ろに埋めるという例も同様であろう。さらに、大日如来の加護に対する期待も感じることができる。また、清和甲で行なわれていたという、大日塚の後ろに流産した子供の遺体を埋めたという例や、疫病による死者を火葬したという例も、異常死に対する恐怖から、あるいは死者の冥福を祈って大日如来の加護を求めようとしたものであると考えられる。

最後に④の大日塚の管理についてであるが、現在塚のあるすべての地域において老人クラブや地域の役員の人びとが彼岸や盆前に草刈りを行なっている。上記のように、清和甲では大日塚のある墓地に墓を持たない家の人でも、役員になると大日塚に気を遣わなければならないという。大日塚が地域の共有であるという意識がここに表れている。

このように、大日塚は現在でも誕生や死にまつわるさまざまな伝承をともないながら一定の信仰を集めている。そのことは、南堀之内や神田で大日如来像に供えられた線香のまだ新しい灰や、清和甲や東和田で大日如来像に供えられた鮮やかな切り花からも明らかであろう。

しかし右記の慣行は、必ずしも大日塚に対する特有の信仰と位置付けることはできない。地蔵のような墓地に安置される石仏に対する慣行と比較して、その内容が特殊であるとは言い難いからである。つまり、現在行なわれている大日塚に対する慣行は、大日塚独特なものとして捉えるよりも、もっと幅広

く地蔵など、墓地に安置される他の石仏に対する信仰と共に捉らえられるべきものなのである。

（3）墓地のシンボルとしての大日塚

それでは、大日塚は墓地においてどのような役割を果たしているのであろうか。この問題について考える際に象徴的なのは、大日塚とロクドウとの関係である。

大日塚の墓地における位置を大日塚とロクドウとの関係から考えると、大日塚の正面にロクドウが設置されるAタイプと、大日塚とロクドウが別の位置に設置されるBタイプの二つに分類することができる（図2）。

Aタイプに当てはまるのは溝原、清和甲、南堀之内、そして東和田の移転以前の墓地および長部、桜井である。大日塚の正面とは大日如来像の正面

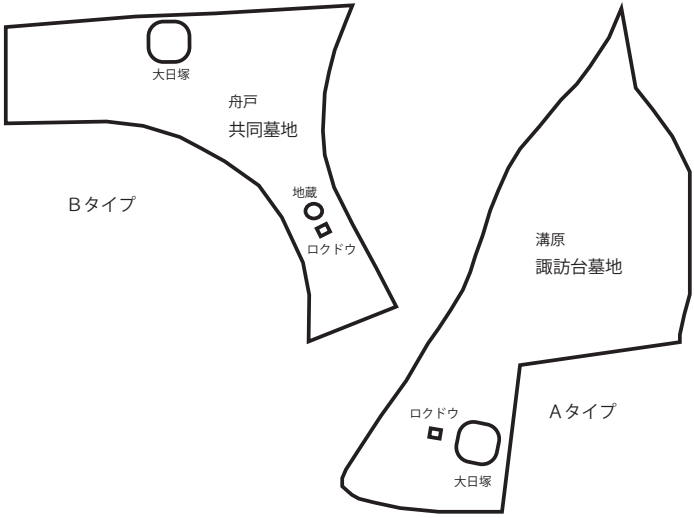

図２：大日塚の位置

ということであり、大日如来像がロクドウを見下ろすような形になる。つまり、大日如来の前で葬送儀礼が営まれるという構図である。ただし、長部の墓地の場合は大日塚とロクドウの間に、江戸後期の農村指導者大原幽学の墓地がある。つまりロクドウは大日塚と大原幽学の墓の両方に向けられているのである。また、桜井の墓地には、大小二つの塚がある。大日如来の石祠は小さな方の塚の上に乗せられている。しかし、ロクドウの向きは大きな塚の方を向いており、塚の前には「奉齋先祖代々之霊祭」と書かれた木柱が立てられている。桜井において神葬祭が優越していることを考慮に入れる必要があるだろう。

一方、Bタイプに当てはまるのは、舟戸と東和田の移転後の墓地である。舟戸では墓地の奥に大日塚が位置し、ロクドウは入り口近くの地蔵の前に置かれている。また、東和田の墓地の場合は、移転にともなって墓地全体が上下二段に整備された。ロクドウは下の段の最も入口に近い位置の六地蔵の前に配され、大日如来像は上の段の最も手前に安置されている。つまり、ロクドウ回しは地蔵に向けて行なわれるのである。ただ、大日如来を墓地の最も手前に安置するということは、このような細長い土地の墓地においては、地蔵と同様に、大日如来を墓地の中心的位置に安置しようという意志の表れだと考えることができる。

以上のような大日塚とロクドウとの位置関係と、前項で述べた大日塚に対する慣行を考え合わせると、大日塚の墓地での役割が浮かび上がってくる。他の多くの墓地では、現当二世にわたって衆生を救済す

るとされる六地蔵が安置され、墓地を訪れる人びとの信仰を集めており、舟戸や東和田では地蔵の前でロクドウ回しが行なわれる。しかし、溝原周辺地域では、古くは大日塚が墓地における儀礼や死そのものを司っていたのではないだろうか。

溝原の諏訪山墓地にはもともと墓石はほとんど無く、多くの墓石が昭和三〇～四〇年代に建ち始めたという。共同墓地に墓石が多く建ち並び始めた時期は、他の地域でもそれほど変らない。つまり、共同墓地では大日塚以外には石造物が少なく、ただ土盛りがあるだけだったのである。

墓石を建てない理由には経済的な事情もあるようだが、地域共同体の決まりとして建てない例も見られた。溝原からは少し離れるが、田部の天台宗西雲寺前にある共同墓地がその例である。この墓地には現在では多くの墓石が建てられているが、昭和三〇年代までは墓石を建ててはいけない決まりになっていた。その理由は限られた敷地しかない墓地に墓石を建てると、墓石が乱立して土葬できる土地を狭めてしまうからである。そのかわりに、金銭的に余裕のある家では西雲寺の境内に石塔を建てていた。いわゆる両墓制の状態である。つまり、この墓地には大日如来像以外の石造物はなかったのである。

田部の大日如来像の造立年は宝暦九年（一七五九）で他のものに比べて新しく、また、塚もない。したがって、溝原周辺の大日塚と一概に比較することはできないが、墓石のない墓地における先祖供養の対象としての大日如来像の存在を見逃すことはできない。つまり、溝原周辺の共同墓地に見られる大日塚は、墓石のなかった墓地において供養塔の役割も果たしていたと推測できるのである。[19]

ただし、大日塚造立当時からその土地が墓地であったか否かについては慎重な確認作業が必要であろう。『千葉県の歴史』では供養塚の周囲を行人の墓域としたという例が報告されており[20]、また、中世においても石塔や経塚が核となってその周囲に墓地が展開する事例が見られるという。すなわち、石塔や塚の造立は「墓地を霊地とする営み」だというのである[21]。筆者の調査では、それぞれの墓地で大日塚の大日如来像よりも古い墓石を確認することはできなかった。また、溝原の大日塚の周囲には、一七世紀後半の僧と見られる人名の刻まれた胎蔵界大日如来像や金剛界大日如来像の墓石を確認することができた。大日塚の周囲に、まずは修験者や行人の墓地が展開していった可能性も考慮に入れなければならないであろう。

三　大日塚の造立者

（1）天台宗寺院の関与

それでは、大日塚はいつ、どのような人びとによって造立されたのであろうか。大日如来像に刻まれた年代と、当時のこの地域の置かれた歴史的背景から考えてみたい。

溝原にある東栄寺は天台宗の寺院である。天明・寛政年中の「上総国下総国天台宗寺院名前帳」には、「北陸山金剛院東栄寺」として「末寺貳ヶ寺　門徒拾六ヶ寺」との記述があり、上総国埴生郡長南郷三途

台村にある長福寿寺の末寺として、大きな力を持っていたことが分かる。溝原周辺に点在する天台宗寺院はほとんどすべてが東栄寺の末寺や門徒であったと考えることができ、溝原がこの地域一帯の宗教的中心地であったことは間違いない。『東庄町史』では溝原と東栄寺について、安政年間に書かれた「東荘志」の記述[22]から次のように位置付けている。「黒部川の水源である溝原の谷頭（やつ）をえらんで東栄寺が開かれたこと、また行基開基の伝承をもつ点などに注意したい。現在黒部川流域の山田町・小見川町には天台宗寺院が多く見られ、また行基にかかわる伝承（例えば行基一木造りの六観音信仰など）がある。これらの濫觴を開いたのが溝原寺だったのではないかと推測する」[23]。東栄寺末の多くの寺院が廃寺となったが、長岡町場の東福寺や、清和甲の永命寺が、東栄寺の末寺として現存している。この東栄寺とその末寺群が大日塚の造立に関わってくると考えられる。

再び筆者が確認することのできた大日塚の分布について地図で確認したい。図1から分かるように、大日塚は干潟町の東西の中心にあたる南堀之内から町東部にかけての台地に点在しており、その分布範囲は東庄町の南西部にも広がっている。

この大日塚の分布圏に溝原の東栄寺と、その末寺であった永命寺と東福寺[24]の檀家圏を重ね合わせてみたい。ただし、東栄寺は江戸時代に二度も火災に遭っているため、過去帖がほとんど残っておらず、檀家圏は東栄寺の住職からの聞書きと、昭和六三年（一九八八）に行なわれた屋根替え工事の寄付者名を記した碑による推測である。

まず、東栄寺の檀家圏は住職によると溝原・舟戸・神田・和田（東和田）・稲荷入・関戸および長岡町場の半数である。水門と桜井も檀家であったが、明治期に神葬祭となった。次に東栄寺末の永命寺の檀家圏は、永命寺住職によると清和甲（諸徳寺を含む）・東入野・西入野・米込・長部・旭市新町・旭市鎌数・旭市琴田である。このうち入野は各宗派が入り混じっている。また、南堀之内も檀家であったが、現在では神葬祭となっている。

これら東栄寺および永命寺の檀家圏にある地名を四角で囲った。この図1から、天台宗東栄寺の檀家圏と大日塚の分布が一致することが分かる。南堀之内より西には天台宗寺院はなく、真言宗寺院や日蓮宗寺院の檀家圏となっている。また、東庄町の舟戸・東和田・神田・稲荷入以外の地域には真言宗の檀家圏が広がっており、それらの地域では大日塚を確認することはできない。さらに、古内や府馬、田部といった大日塚の見られる地域はこの地域の北に続いている。これらの地域では修徳院や西光寺といった天台宗寺院が檀那寺となっており、この点でも天台宗と大日塚の結びつきの強さが示されている。

次に東栄寺以外の天台宗寺院について『下総国香取郡寺院明細帳』[25]を参考としながら、その由緒を見てみたい（由緒の記入されていないものは省く）。

① 永命寺（天台宗・東栄寺末）

・所在地：千葉県管下下総国香取郡清和村字中屋敷

・由　緒：右者比叡山横川恵心院源信彫刻ノ薬師如来ヲ以テ為本尊当本寺東栄寺十六世法印什鎮潤色之享保八年法印珍栄中興之当代ニ至テ二十九世相続仕候

②　徳西寺（天台宗・東栄寺末）

・所在地：千葉県管下下総国香取郡清和村字中屋敷

・由　緒：当本寺四十九世法印弁海創立之其後貞享二丑年堂舎再建当代迄二十五世ニ候

③　長栄寺（天台宗・東栄寺末）

・所在地：千葉県管下下総国香取郡清和村字宮下

・由　緒：当時（ママ）ハ建治元亥年千葉六郎胤頼七星ヲ祭リ以テ皈依僧現亮阿闍梨為開祖其後天和三亥年法印什長中興之拙僧マデ二十五世ニ候也

④　東福寺（天台宗・東栄寺末）

・所在地：千葉県管下下総国香取郡万歳村字寺町場

・由　緒：延宝三乙卯年創建右本寺六十三世什観法印開基其他由緒不明

まず永命寺については、東栄寺の十六世である法印什鎮が開基であること、享保八年（一七二三）には法印珍栄が中興したことが注目される。次に徳西寺は東栄寺の四十九世法印弁海が開基し、貞享二年（一六八五）に堂舎が再建されている。さらに長栄寺については、天和三年（一六八三）に法印什長によって中興されている。最後に、東福寺については、延宝三年（一六七五）に東栄寺の六十三世什観法印が開基となっている。

宮本袈裟雄は徳川幕府による修験道法度の意義のひとつについて「この法度によって本山・当山両派の並立が確定するとともに、全国規模での組織化が一層進展したことである。そしてほぼ元禄年間をもって全国規模での組織化が完了したとみることができる。換言すれば中世末ごろから始まった里修験化の過程が終了し、修験道の近世的形態、つまり里修験の時代を迎えるに至ったといえる」と述べている。さらに「見のがすことのできない点」として、「本山・当山の組織化が進んだ結果、江戸時代後期から幕末に存在した修験寺院の多くが、このころに開基・中興の時期を求めていることであり、末端の修験に至るまで組織化の動きが浸透していたこと」を挙げている。[26] これらの寺の中興の年代はまさにこの里修験の組織化の動きと同時期である。さらに、大日塚造立の年代と重なっていることも興味深い。

また『東庄町史』には、東栄寺住職の談として「地勢上、同寺は黒部川水源の谷地の最奥部（諏訪山と谷頭を同じくする）に位置し、その本堂裏手の崖先に湧水があり、かつては同寺護摩堂の修行者の『行井戸』に供されていた」[27] という記述が見られる。さらに溝原の旧家には、熊野の修験者であった先

祖がこの地に移り住み、東栄寺の住職も務めたという伝承が残されており、近年まで、正月には東栄寺の住職の方からこの家に挨拶に出向いていたという。また、このあたりの旧郷社が熊野神社であることや、溝原の氏神も熊野神社であり、熊野神社とこの旧家との結びつきが深いことも考えると、元来この地は修験的な要素の強い土地であったことが推測される。

（2）修験者の関与

以上のように、大日塚の分布と天台宗寺院の檀家圏の重なり、そして天台宗寺院と修験者との関わりは、大日塚と修験者との強い結びつきを想像させずにはおかない。そして、桜井の大日塚の石祠に見える「□殿山」という文字や、南堀之内の大日如来像に見える「奉造立湯殿山参詣成就」という文字、さらに東和田の大日如来像に刻まれた「湯殿念仏供養」という文字から考えると、その宗教者が出羽三山系の修験者である蓋然性が高い。しかし、これが大日如来を教主とする真言密教と深く結びついた湯殿山系の修経者または行人であるかどうかは慎重に判断されなければならない。江戸時代には羽黒山の霞場でも羽黒詣とか月山詣とは呼ばずに湯殿詣と称したり、羽黒山が頒布した券数や御影札も湯殿権現を主尊とし、さらに山内寺坊の本尊でさえ湯殿権現を中央に安置していたという。[28] こういった事情と溝原周辺の大日塚が天台宗寺院の檀家圏と重なることを考えると、この地域に大日塚をひろめた宗教者は、天台系に帰入した羽黒派修験であった可能性が高い。

さて、大日塚の造立された寛文から元禄にかけての時期には、寺院の僧侶とは別に出羽三山系の修験者らしき宗教者が溝原周辺の地域に入っていた記録が残されている。すなわち宗休と見戒、そして了翁である。これら三人が出羽三山系の修験者であるというはっきりとした記述は見られないが、その遍歴などを見ると、何らかのかたちで出羽三山との関わりを持っている。

まず宗休は美作国の出で、故あって生涯に一万体の阿弥陀仏を彫刻することを誓願した。諸国行脚の末、下総国香取惣持院に千体仏を納めた宗休は、椿新田開発にともない、新田五箇寺が新たに建立されることを聞きつけて、東福寺の本尊彫刻を願い出たという。それを許された宗休は延宝二―四年（一六七四―一六七六）にかけて東福寺の本尊を完成させ、さらに延宝五年（一六七七）には自像を刻し、九月二四日に六二歳で溝原諏訪山墓地の近くの土地に入定したという。ここは宗休塚と呼ばれ、現在は干潟町指定史跡となっている。この宗休塚の前には金剛界大日如来と胎蔵界大日如来の二体の石仏がある。筆者自身は確認することができなかったが、金剛界大日如来像の台座には「浄法院木食宗休大徳」という法名と、「延宝五丁巳九月二十四日」という年月日が刻まれているという[29]。

宗休が土中入定しているという伝承や、両界の大日如来像が塚の前に置かれていることから、宗休が修験者であることは間違いないであろう。

また、宗休が千体の仏を納めた寺院は以下のとおりである[30]。

奥州相馬原円応寺　上総国一宮観明寺　奥州湯殿山本道寺
常陸国猿田山浄蓮寺　下総国香取惣持院　上総国富田光明寺
総州大須賀伊能宝応寺奥州仙台荘厳寺

これらの寺院の所在地はすべて現在の千葉県以北である。また、湯殿山の本道寺に千体仏を納めていることも注目される。

次に見戒についてであるが、この人物については「下総国香取郡関戸村誌」[31]の記述を引用しながら確認してみたい。

「伝ニ曰ク寛文年中椿湖水開墾ノ際元京都菅家末葉謂アリテ脱藩紀州奈智山[ママ]ニ於テ剃髪見戒和尚ト改称シ諸国行脚ノ際本村農家へ一泊其夜家主ト同夢見テ互ニ語リ合ウ処北方上代神田村字植松林安兵衛坪山ニ樅木アリ買求メ不動尊ヲ刻当地へ安置サセヘシトノ現夢見戒和尚壱寸八分の不動を肌身離さず持歩□□ヨリ両人奔走シテ観ルモ豈□ラハンヤ現存ナリ因テ買求メ不動尊ヲ三躰刻マセ溝原村へ及和尚主住トナリ天台宗羽黒末派一ヶ寺開基創建ス則チ上野東叡山へ寺院号願允可相成テ龍宝院見海寺称シ海上郡成田村湯源寺塚本村宝積寺支配ヲ受ケ五穀豊熟ノ本村祈願所ト衆□崇フ其際見戒和尚遺言ニ此里へ爾来疫神必ラズ這入ル事禁シ東西村界へ呪文壱封ヲ埋メ其為メ未タ辻切ヲセズ此辻切は他村の習慣にして年毎初春疫神除け祈念の辻切を祭るなり其際和尚ハ享

保六辛丑年三月卒ス其墓標龍宝院見海上人トシテ衆□ニ今崇フナリ」

以上の記述からは、見戒が実際に出羽三山に赴いたことがあるかどうかは分からない。しかし、常に不動尊像を身につけていたことから、見戒が修験者であったことが推測できる。また「天台宗羽黒末派」の寺院を創建し、上野東叡山、つまり寛永寺[32]に寺院号を願い出ていることなどを考えあわせると、何らかのかたちで羽黒山や天台宗との関係を持っていたことが理解される。また、『千葉県香取郡誌』の草稿とみられる史料[33]にも、見海寺に関する記事が見られ、不動明王と大日如来を本尊として居ることが分かる。

見海寺跡は現在、関戸地区の集会所となっているが、この集会所の敷地内には見戒の墓がある。この墓のすぐ後ろには幅二・六×高二・五メートルほどの塚が築かれており、塚の上には金剛界大日如来の座像が安置されている。この像には「開山見海上人五十回忌」という文字が刻まれている。

最後に了翁であるが、この人物は江戸前・中期の黄檗宗の僧である。寛永七年（一六三〇）に出羽八幡で生まれ、寛永一九年（一六四二）に出羽の曹洞宗寺院竜泉寺で出家した。松島の臨済宗瑞巌寺の雲居希膺や山城宇治の黄檗宗万福寺の隠元隆琦らに参禅し、さらに、江戸で売薬店を開いて蓄財し、寛永寺に経堂を建立して天海版大蔵経を寄進した。また真言宗・禅宗などの寺院を建立再興した[34]。椿海干拓の事業にも関わっていたという。

つまり了翁は黄檗宗の僧侶でありながらも諸国を廻り、宗派の別なく経堂や寺院の建立に寄与したのであった。また、椿海干拓などの社会的事業にも大きな貢献をした。

了翁の出身地が出羽国であり、また上野の寛永寺とのつながりが深いこと、さらに全国を行脚して公共の事業にも関わっていることを考えると、彼もまた修験者的な要素の強い人物だったことは想像に難くない。

これら三人の人物が大日塚の造立に直接関わったかどうかは分からない。しかし、出羽三山、とくに羽黒山と関係の深い人物が大日塚造立時期と同時期に当地を訪れ、活動していたという事実は注目に値する。また、この時期はこれまでも述べてきたように、椿海の干拓が行なわれた時期であった。

『干潟町史』によると、椿新田開発工事の開始時期については諸説あるようだが、寛文一〇年（一六七〇）というのが最も有力である。そして、それより前の寛文七年（一六六七）から九年（一六六九）にかけて開発工事が働きかけられ、許可されたものと考えられている。その後、延宝・天和・貞享といった時代に開発工事が進められ、元禄八年（一六九五）に検地が行なわれている。[35] 前出の三人が溝原周辺の地域にやってきたのも、この地域に大日塚が造立されたのも、まさにこの時期であった。

この時期に干潟町へやってきた宗教者は、史料に名を残している彼ら三人だけではないであろう。元禄八年の検地によると、この開発事業では三三八一町八反八畝二一歩の土地が新たに作られ、検地後一八年を経た正徳三年（一七一三）には七六三軒が新田村落内に数えられている。[36] 当然、多くの宗教者が、

新しく出現したこの巨大な布教地を目指して集まってきたはずである。その中に彼ら三人のような出羽三山と深いつながりを持つ人びとが多く含まれていたことは想像に難くない。

しかし、ここで一つ疑問が残る。それは、なぜ新田の地域に大日塚が見られないのかということである。新田地域に大日如来像がまったく見られないわけではない。太田町場の東福寺の境内にある墓地には胎蔵界大日如来の座像がある。この像は元禄三年（一六九〇）に造立されたものであり、「奉待廿日□二世□楽也」と銘文が刻まれている。ところが、この大日如来像は他の石仏と並べられており、塚を築いて祀られた形跡が見られない。たとえ塚が崩されたとしても、元来塚の上に祀られていたものであれば、他の石仏とは分けて井桁のような台の上に祀ってあるのが一般的である。[37] また、墓地ではなく寺の境内にあるという点で、塚をともなわない他の大日如来像とは異なっている。

この疑問に対する答えは、やはり新田村落という土地柄に関わっているものと考えられる。

まずは新田での農業生産力の問題が挙げられる。元禄八年（一六九五）の検地の時点では、新田全体の半分が田となっている。しかし、この田のほとんどは下田や下々田、あるいは悪地下々田であった。開発が進んだとはいえ、まだ耕地化されていない部分や、耕地に適さない部分が全体の四割を占めていたという。このような新田村落の生産力が安定してきたのは延享、宝暦の時代、つまり一八世紀の半ばだとされている。[38] つまり、大日塚を造るだけの余力が、この時期の新田村落にはなかったと考えられるのである。

次に共有地の問題である。大日如来像に僧以外の個人名が記されていないこと、大日塚が共有地である共同墓地にあること、そして大日塚を築き、その上に安置する像を入手するためには、相当の労力と財力を必要としたであろうことなどを考えあわせると、大日塚が特定の個人の所有ではなく、集落あるいは集落の行人によって共有されるものであったことが理解される。したがって、新田村落内に塚や大日如来像のない理由は共有地の不足といった問題からも考えられる。

椿新田開発事業においては、新しく創出せられた土地を一町歩あたり五両の値段で売るという形で、土地の分配が行なわれた。その後、新田地の値段は徐々に高騰し、天和二年（一六八二）には一町歩が七両で売られた記録が残っている。さらにこの土地は、元禄八年（一六八五）には一町歩が十両以上の値段で転売されている。[39] こういった事情を考えると、当時、新田地に大日塚を築ける共有地がどれほどあったかは疑問である。

ただ、新田には多くの砂間、つまり農地に適さない土地があった。しかし、こういった土地は大日塚を築くには不適当であった。なぜなら、砂間は文字通り砂質の土地であり、塚を築くには適さない土質なのである。この土で塚を築いた例が見海寺跡にある見戒の墓の後ろの塚であるが、この塚の大きさは大日塚に比べて非常に小規模なものである。さらに土が固まりにくく、すぐに流れてしまうため、老人クラブで毎年土を盛り直しているという。つまり、新田の土は塚を築くには適さないのである。

おわりに

小稿では、千葉県旭市旧干潟町溝原周辺地域の共同墓地に造立された大日塚について、塚の形状や大日如来像の種類や銘文を確認した上で、大日塚にまつわる現在の民俗の分析を行なうとともに、大日塚がいつ、どのような人びとの影響によって築かれたのかについて考察を行なった。

その結果、少なくとも干潟町の溝原周辺地域の大日塚は「二世安楽」や「月待」、「湯殿山参詣成就」など祈念・記念して造立され、現在では共同墓地全体の供養塔としての役割を果たしていることが分った。また、この大日塚をもたらしたのは、当時の溝原周辺の宗教的環境を考えると、天台宗系の修験者または行人である可能性が高いことも明らかとなった。

ただし、このような結論は、あくまでも溝原周辺地域の大日塚のみに当てはまるものであり、今後、他地域の大日塚との比較も行なわれなければならない。

〈付記〉

小稿は筆者が文学研究科博士課程前期に入学した平成十一年夏から翌年夏にかけて行なった調査をもととしている。この調査は干潟町をフィールドにさだめ、田中宣一先生と当時の大学院のゼミ生によっ

て行なわれた。小稿執筆にあたっては塚の測量や像に彫られた銘文の確認等、簡単ながら再調査を行なった。この調査では、田中ゼミの後輩の加藤秀雄君が快く手伝いを引き受けてくれた。感謝申し上げたい。

註

（1）『金沢文庫古文書』第七輯（所務編）、金沢文庫、昭和二五年、八六―八八頁

（2）東庄町史編さん委員会編『東庄町史』昭和五七年、三四二頁

（3）塚の造立と大日如来像の安置が同時であったか否かについては断定することができない。しかし、後で述べるように多くの地域で同様の塚が造立されていることや、大日如来像に彫られた年代に出羽三山系の修験者が活発に活動していたという歴史的背景を考慮すれば、塚の造立と像の安置が同時であった蓋然性は高い。

（4）ただし、東庄町神田には、大日如来ではないが出羽三山の名を刻んだ板碑が見られる。

（5）柳田國男「塚と森の話」（『柳田國男全集』第二十四巻、平成一一年〔明治四五年〕、一〇二―一一一頁）

（6）今井善一郎「供養塚としての行人塚」（『民間伝承』第十三巻第十一号、日本民俗学会、昭和二四年一一月、八―一一頁

（7）松崎憲三「行人塚再考―塚をめぐるフォークロア（一）―」（『日本常民文化紀要』第十七輯、成城大学大学院文学研究科、一九九四年）

（8）山中正夫「寛永期大日塚信仰の論点について」（『茨城の民俗』第二十四号、茨城民俗学会、昭和六〇年）

（9）財団法人千葉県史料研究財団『千葉県の歴史』通史編 近世2、平成二〇年、千葉県、八二〇―八二一頁

（10）（9）同書、八二〇―八二三頁

（11）小稿で扱う大日塚についても、修験者の墓とは考えにくい。なぜなら、そのような伝承がまったく聞かれない

上に、溝原の宗休塚のように、大日塚とは別に修験者の墓が造られている例が見られるからである。

(12) 神田の大日如来像は現在台座の上に乗せられているが、大正初期の墓地整理の前は幅六尺×高さ四尺（約一・八×〇・九メートル）ほどの塚の上に安置されていたという。この塚は他の塚に比べてずいぶんと小さい。神田の大日如来像に関しては造立年代が溝原周辺の他の大日塚の像よりも新しく、この地域における一連の大日塚造立の流行とは切り離して考えるべきであろう。

(13) 中山正夫『反柳田国男の世界―民俗と歴史の狭間―』近代文藝社、平成四年、一三〇頁

(14) (9) 同書、八三八頁

(15) 『広報やまだ』第四十七号、山田町、昭和三五年一一月、九頁

(16) 埋葬前の遺体や遺骨を一時的に乗せる四角い台。石やコンクリートでできている。この地域一帯の共同墓地には必ず見られる。どの地域のロクドウも大きさは高さ六〇～七〇センチメートル、一辺七〇～八〇センチメートルほどである。行事・台ともにロクドウと呼ばれいる。

(17) 三角芝は諏訪山の墓地から二〇〇メートルほど南西にある、三本の道に囲まれた三角形の土地で、招魂碑や金毘羅大権現などを祀った石碑や祠が五つある。入り口には鳥居が立てられている。宗休塚については後述する。

(18) 男女の墓が別けられている原因については「行人になりうるのは男子に限定されていることから、男女別墓制を現出させることにもなった」との指摘が見られる（(7) 同書）。

(19) 新谷尚紀は両墓制における埋葬墓地の特徴について、各地の事例から「ほとんどの事例に共通して、それらが一定の集落の共有墓地というかたちをとっている」ことを指摘している（新谷尚紀『両墓制と他界観』吉川弘文館、平成三年、七六頁）。また、日本の土葬墓制を「個々の死体埋葬地点と石塔建立地点との両者の位置関係に注目するという視点」に立って五類型に大別しているが、そのなかで類型Ⅰとして「死体埋葬地点に一連の墓上装置を施すだけで石塔はどこにも建てない」かたちを「無石塔墓制」として挙げている。さらに他の四類

型が「類型Ⅰの存在から推定されるところの石塔以前の埋葬墓地を共通の基盤とし、それに対する新たな石塔という要素の付着のしかたによって分かれたそれぞれ変化形である」ことを指摘している（同右、四三頁）。前述のように大日塚の見られる溝原周辺の墓地はすべて共同墓地であり、それらの墓地の多くで、昭和三〇～四〇年代まで墓石が建てられることは少なかった。したがって、墓石が建てられる以前の溝原周辺の墓地は、「無石塔墓制」とすることができるであろう。

(20) (9) 同書、八三九頁

(21) 藤澤典彦「墓地景観の変遷とその背景―石組墓を中心として―」（『日本史研究』第三三〇号、日本史研究協議会、平成二年、九八―一〇〇頁）
村木二郎「経塚の拡散と浸透」（小野正敏他編『中世の系譜―東と西、北と南の世界―』考古学と中世史研究1、高志書院、平成一六年、五九頁）

(22) 「東荘志」の記述は次のとおりである。「溝原村は小見川耕土の谷ツ頭なり。谷ツ頭の崇（ママ）ると云は八ツ頭の唱なれば、八岐の大蛇を怖るゝ心なるべし。谷ツ頭の崇を防がん為ニ行基菩薩東栄寺を建立すと云へり。是東栄寺小見川耕土第壱の谷ツ頭なり。水の元成る故に水原村と云。原は元と云字なり。水元村なり。千葉家記録に水原村とあり。是本名なり。何の頃溝原村とは改めしや」（巻之四）（(2) 同書、三四三頁）。

(23) (2) 同書、三四三頁

(24) 永命寺は明治に入ってから、東栄寺から分かれた。東福寺は現在でも東栄寺との関係が深く、無住となってからは東栄寺の住職が兼務している。

(25) 干潟町史編纂委員会『干潟町史』干潟町、昭和五〇年、四七六―五〇五頁

(26) 宮本袈裟雄『里修験の研究』吉川弘文館、昭和五九年、二八―二九頁

(27) (2) 同書、三四三頁

(28) 宮家準編『修験道辞典』東京堂出版、昭和六一年、二五七―二五九頁
(29) (25) 同書
(30) (25) 同書、一六四六―一六四七頁
(31) 『下総国香取郡関戸村誌』年代、筆者等不詳。
(32) 天台宗大本山、東叡山、円頓院。寛永二年（一六二五）の開創で、開山は慈眼大師天海。開基は三代将軍徳川家光。幕府の官寺として比叡山と並ぶほどの大きな勢力を占めた。寛永一八年（一六四一）、羽黒一山はことごとく東叡山に帰入した。
(33) 『千葉県香取郡誌』は大正一〇年に千葉県香取郡役所より発行された。
(34) 『日本仏教人名辞典』法蔵館、平成四年、八一一頁
(35) (29) 同書、二九三―三二六頁
(36) (29) 同書、三二四頁
(37) 神田や東和田、そして南堀之内の大日如来像の例。
(38) (29) 同書、三一六―三一八頁
(39) (25) 同書、三〇六―三〇七頁